

1919年 (大正8年) [15歳]

「辰雄日誌 1919」No. 5 (2)

—— 1919年1月1日～11月7日 ——

小池辰雄

高等師範 (現筑波大学) 附属中学校 4年生

○1919年1月1日 (水)

曇、風強し。四方拝。起床6時半、9時より講堂にて式あり。終えて森本先生、古川先生、石黒先生の家に行き、それより8、9軒廻わりて帰る。朝日新聞の大絵付録「朝の晴雪」元日方に富士山傍より日の出でんとするところを表わしたるもの氣に入りて壁上に掲ぐ。午後2時頃より急に風木の枝を鳴らし土砂を巻き上ぐ。青木、吉原の両家へ参る。就寝8時半。

○1919年1月2日 (木) ～ 1月22日 (水)

ズベル。

○1919年1月23日 (木)

快晴。今日はそう寒くないので外套を着て行かなかった。文法の時間 (用言と助詞との接続その2) の所を習う。を、が、に、は動詞・助動詞・形容詞の連体段に添いて条件の下に起こるべき事実の一致せざるを示す。の所を読み、森本先生、

「この本はなかなかよく出来ている。(ちよつと笑つて) そんなことを見て、この本を選んだんじゃあないんだぜ (大いに笑われる)」

僕等は先生が言われる前、放笑した。を、が、に、こう書いてあるとなお面白い。

英語は、Dictation [書き取り] をした。漢文の時間もなかなか面白かった。帰宅して、きなこ餅を三つ食べ、青森辺の林檎を二つかじった。炬燵にあたつて新聞を読んでいる中に眠くなって20分程眠った。

夜、青木の喬さんが2、3日前、風邪でそれが重くなつて危篤になられたということをうかがつて大いに驚いた。最後の注射に巧あつて、漸次回復されていられるということ甚だ安心した。又スペイン風邪 [註… 一般的に1918年から1920年にかけ全世界的に大流行した] が襲来した様である。

訓言。意志薄弱なれば事ならず。

○1919年1月24日 (金)

快晴。今日の英語の時間は最初の英語の教生の先生の最後の時間である。先生は自分の



教えて行く上の参考にすると言われて、僕等に批評を書かせた。今日は、The Little Match-Girl〔マッチ売りの少女〕の章を全部終わらせた。実に可哀そうな話であった。

作文は「対校競技の利害」という題、ちよつとした論文である。一枚半程書いた。今日は又寝た(帰宅して)。夜の7時から9時まで「フランダースの犬」という書(ウイダという英国に生じた佛蘭西人の著したもの。著者の名声世に噴々とあり。著者の小説中の傑作なり。世の弱きもの、貧しきもの、蔑げられたるものに瀝ぐ著者の熱血は凝って此の一篇と成る。其の小冊子を以て能く『世界最良図書百巻』の一に数えられるるも尚に故なきに非ざるなり、ということはいがきの一部にありたり)を読んだ。二度目である。実に僕はこの書を好む。貧者に大いに同情する。話は悲哀のある、又麗しいものである。教訓も受けた。有益な書である。清という子供の人物を大いに褒める。何べん読んでもあきないであろう。なお深くあじわうことが出来るであろう。

○1919年1月25日(土)

雨天。朝から雨が降り続けていた。寒稽古は今日は切りかえしで失敬しておいた。一人の人と三度会釈して三度切りかえして、三本とつけた。雪もちよつと降ったが、すぐ歇んで又雨ばかり降りつづけた。家へかえると、気が伸伸びりして、昼食に40分かかった。さすが眠たくなつて、炬燵に眠り込んでしまった。眼が覚めて時計の針を見れば、短針が3時すこしすぎたところ、長針が20分のところを指していた。そのためすこし予定がくるった。すこしどころか随分くるった。夜にランプに勝つて、テンプラを食べた。非常にうまかった。その頃は空には白雲が密閉して所々の隙から遠い星の輝々と眼ばたきして居るのが見えた。雨は一つぶも降つてこなく、白雲に雨あるやと見るも、綿の如く水気なきが如く見えた。新しい足駄^{あした}を長持の側に置いて寝た。

○1919年1月26日(日)

晴天。5時10分前! 突如として闇を裂いてデリデリデリと目覚時計。狼狽と悲観の思いで、時計の鳴るのを止めた。やつと安心したが起きなければならない。思い切つて電灯をひねった。聴^{やが}て新しい足駄を履いて門を出た。実によく晴れきっていた。九天には和^か氏の壁^{へき}でもくだいた様に清き星が一面にちらばっている。かねてすこし星座を覚えて居た僕は、即ち天文学者みたいに、やああれが Milky-way、あれが Cassiopeia、あれが Polaris、あれが Ursa-major、あれが Ursa-minor 等、即ち星座を見出だして心に思っていた。道がゴツゴツとして足駄なので時々転び様になったこともあった。又滑べる。グチャグチャにぬかった道がそのまま凍っているのである。足駄の音が非常によく響く。後からも相応じて響き出した。後で見ると、早川さん(5年の)であったことがわかった。途中、牛乳配達夫と一匹の犬に遭つたとき時々犬の咆哮する声の遠くに響くのを耳にするばかり。今日は



何うしてだか、同級生が少なかった。

6時40分、道場を出づ、広瀬と共に帰った。8時半まで一人で茶の間のこたつにあたつて、『シャロックホルムス』を読み耽った。実におもしろい本である。シャロックホルムスの頭脳も明晰なこと推理のよく適中すること、今さういうまでもない。普通の夢の様な活劇とはちがう。午前は代数をやった。

士官学校の兄さん〔龍二〕が帰つて来られなかったのは残念であつた。就寝10時。

○1919年1月27日 (月)

曇天。起床6時半。今日は伊藤先生の送別試合及び森本先生の送迎会あり。寒稽古は今までは快出席。Little Lord Fauntleroy〔小公子〕は相かわらず兄さん〔政美〕に習つて居る。

「そろそろしつかり勉強しないと一高へはいれないよ」といわる。今は教生にならつてゐる最中である。

○1919年1月28日 (火)

晴天。大正8年1月28日より第三学期及び学校以外の英書。又はその他のカキトリ読むについて予定表を造り、初め長く続行しようと決心した。まず今日は一週間後までの表を造つた。第一日目なるが故に勿論実行が出来た。

《博物 (節足動物の分類表) “A Holiday At a Farm”》

《“Picture stories for little Folks”, P.S.F.L.F》

○1919年1月29日 (水)

晴天。今日は外套を着て行く。剣道は切りかえしをして5本とつけた。博物の教生は中々面白くて、時間も従つて面白い。英語の教生の綽名はアンコウというのである。

I took a fish (Anko) at lunch. といつて書かせたときに皆は哄笑した。後にたくさんの教生が見て居たその時ちよつと後を見を通したらへんな顔をして居た。幾何の教生はあまり教え方がうまくない様に思われる。切線のことを「シェツ線」という。又、二等分線のことを「二等分シェン」というくせがあつて、教生の先生も、癖でなおらないから笑わなくてくれといわれた。それから笑わなくした。

《歴史 (東洋史近古史、第一蒙古の勃興)、“P.S.F.L.F” “Bunny on A Holiday”》

○1919年1月30日 (木)

雪。7時、障子をガラツと何の気なしに開けた。こは何かに。僕の目は即ち覚めた。それは雪が一面に万象を蔽つてその清麗なる白銀の光が目驚かしたのであつた。思わず「雪」と発した。三寸位は確かに積もつていたであらう。雪のいたずらは中々面白い。



国語の教生は今日はばかに御機嫌が悪い。初めから後まで恐っていた。僕等の中にもすこし罪はあったかもしれないがとにかく向こうが悪いことは当然であった。鬼狩がオジャンになったのがっかりした。併し村長さんがなくなったのではしかたがない。鬼狩あれかしと予め祈っていたのは寒稽古のつぶれることを願っていたのであった。雪は3時頃やんだ。仲々よく降ったのでよくつもった。

《英語 (Gallay-Slave) “Naughty Jommy”, P.S.F.L.F》

○1919年1月31日 (金)

晴天。遅刻。嗚呼何たる残念なりし事かな。小学校時代には一度も遅刻したことがなかった様に覚えている。中学入校以来遂に二度に及んだ。実に残念千万なことである。

作文「活動写真の利害について」は良であった。又、この間の「対校競技の利害」もかえしてくださった。一時間中批評があった。

《幾何 (——) “A trip to the Stars”, P.S.F.L.F》

○1919年2月1日 (土)

曇天。今日は前日の遅刻のおじけがついて、いつもより十分位早く学校に着いた。未だ雪が残っていて道がわるかった。この間大変なことがあったのを書くことを忘れた。雪の降った日のことである。3年の教室の前方五間位のところへ森本先生の顔を非常に大きく黒く土を線であらわして書いた。大変な御立腹であったがようやく、赦寛してくださった。書いたものが殊に叱られたのである。

《地理 (——) “A visit to the Zoo”, P.S.F.L.F》

○1919年2月2日 (日)

晴天。アスパラガスが熱帯植物とは知らず、雪をふりかけて、料肥を与えた気でいた。幾何、英語をとくにやる。夜10時頃から雪が降り出す。

《歴史 (第二、元の世祖、東西交通)》

寒稽古へ行く。帰ってから寝た。仙台の兄さん「山本保、姉富士子の夫」が来られた。

○1919年2月3日 (月)

雪。雪が積もっていたのには驚いた。5寸は確実であった。雪合戦が盛んであった。帰りに岸上と喧嘩した。確かに向こうが悪い。随分生意気なことを言ったので随分癪にさわった。自ら学問ができるなどと自称するやつには六なのはいいないと、口の中で思っ、相手にしなかった。

《修身 (第三学期) “A visit to the Zoo”, P.S.F.L.F》



○1919年2月4日 (火)

《英語》

○1919年2月5日 (水)

晴天。月謝を出す。

○1919年2月6日 (木)

晴天後曇天。

《漢文》“A bull At A Pichie”, P.S.F.I.F》

○1919年2月7日 (金)

曇天、寒し。

《地理》“The Tale of The Rat”》

○1919年2月8日 (土)

大降雪。関東蹴球大会第2回目の初日であった。雪が降っているにも拘らず雪中挙行する。降り積もること8寸以上乃至1尺に及ぶ。36年目の大雪だそうである(東京の)。明日の寒稽古にはとても下駄は行けない。

○1919年2月9日 (日)

晴天。起床5時15分前。洋服で出掛けた。大変な雪、一人町をあるく。途中巡査が「どこへ行くの」ときく。「寒稽古へ行きます」と僕。「寒稽古」彼がうなずく。学校へ着いたのは5時。既に運動場を横切つて、足跡真一文字に着いていた。5時半から開始したので6時半に終えた。これが寒稽古の最後の日である。ようよう皆出席をしたことになった。しるこをたべて、雪すべりをして、帰ったのが10時。午後から士官学校の兄さん〔龍二〕が帰つて来られた。

○1919年2月10日 (月)

晴天北風。雪を廊下で投げて、おまけに先生の頭からかかったので(森本先生)、国語の時間大変であった。3年の乙級はこのごろよくお目玉を食う。いたずらざかりである様である。昨日風邪をひいたので今日の剣道はきりかえしをした。家へ帰って寝た。

○1919年2月11日 (火)

晴天、あたたかし。紀元節。学校を休んだ。木内さんの演説を聞くことが出来なかった



のは残念であった。桐陰会三大節の一つ、創立記念日である。故に、世界最良図書百巻の一に選ばれたる名著、Black Beautyの訳本『黒馬物語』を読み初めた。士官学校の兄はペンかえって来られて、賢所参拝に行かれた。秀光の刀を抜いて見られてしきりに嘆じて居られた。

○1919年2月12日(水)

晴天。

○1919年2月13日(木) ～ 4月4日(金)

〔記載なし〕

1919年(大正8年) 4月 (第4学年)

○1919年4月5日(土)

曇天。一高対三高大野球戦。

(二高) : 兼重(左)、内村(投)、笹原(中)、島村(二)、木内(捕)、小田切(遊)、戸田(二)、橋本(三)、笹川(右)。

(三高) : 今田(二)、平井(中)、内藤(二)、岡本(捕)、木下(三)、宇津木(右)、朴(投)、伊藤(遊)、古梅(左)。

(二高) : 0 0 1 0 2 0 1 0 4 A

(三高) : 0 0 0 0 0 0 0 0 2 2

内村君の見事な牽制につりだされた三高の木下一塁・二塁間で挟撃され遂に小田切さんに刺しとめらる「挟み撃ちの漫画的なスケッチあり」。一高軍大勝す。4 A対2。

○1919年4月6日(日) ～ 8月31日(日)

〔記載なし〕

○1919年9月1日(月)

晴天。40日間の暑中休暇は終わった。休中依然として日記を中止して居た。よくないことであつた。7月21日から8月10日まででは水泳部に生活した。最後の試験に3級に進級した。百碼(ヤード)競泳には初めて一等を得て、初めてメダルを得た。大遠泳は全泳出来なかった。

8月26日のことであつたろう。宇都宮の兄〔龍一1898～1993〕が西比利亜^{シベリア}出征の内命に接したという葉書がとどいた。兄は勿論前から切望して居られたのであるから喜んで居られた様に見える。28日正午突然来られた。僕一人しか居なかった。非常に驚いたが嬉しかった。



日中のこととて暑さが烈しいから例の如く氷をとった。その日から昨日まで数少なき軍事上秘密の地図を6枚程うつした。それはもらうことの出来ない地図だそうで、うつしてそれを戦地へもって行くという命令だそうだから已むを得ずうつしたのである。軍刀、短銃、望遠鏡など様々準備に忙しがって居られた。

今日は第二学期の始業式である。青桐の実が多数なつて居った。また田中先生の世界新地図に関する御講話が二時間程あつた。

○1919年9月2日 (火)

晴天。暑烈し。7時に始まり、11時半に終る。桐の実ぶつけが早速始まった。夕方、兄が一度宇都宮に帰られるので上野駅に見送りに行つた。親類の人々も来られた。今年はよく氷を呑む。

○1919年9月3日 (水)

晴天。一番上の兄(政美)が葉山に行かれた。8日にかえられる様である。残暑は中々暑い。近頃は少しも雨が降らない。

○1919年9月4日 (木)

晴天。夏休中『リンカン』を読んだことを書いて置く。内ヶ崎君の父が著したもの。彼に進められて読んだ。前からも読みたいと思つて居たが買わなかつた。実に彼の性格、言行に感じ又有益な教訓をこの本から多数受けた。彼のあくまで正義に組し、善と思つたことはいかなる恐れも抱かず為し、あわれなものをたすけた。謙遜の徳があつて人にえらぶる所は少しもない。貧困とよく戦い、勤勉であつた。上ればまだ数多くある。僕の尚何回もよまなければならない本である。

12時半頃、宇都宮の兄が冬服を着て、短銃、水筒、背囊、双眼鏡、軍刀などを携えて来られた。肩の星が六つ光つて居た。武装した所は勇ましいものである。この暑い最中に冬服ではたまらない。晩の9時の汽車でたれたるまでゆつくり家に居られて話した。8時愈々例の如く武装して出征の途に上られることとなつた。電車がすいて居たので涼しかったからよかった。何の人も、視線を武装の姿に向けて離さない。やがて東京駅前停留場に来た。電車を乗りて、兄は宮城に向いて最敬礼をされた。東京駅まで涼しい風に吹かれて静かな広場を四人は歩いた。駅内へ入ると急に賑やかである。見送りに来てくださった人が大勢居られた。入場券をかつて僕は仙台の兄(山本保、姉富士子の夫)と走つて、席をとって置いた。この時は時間のたたないことを望むのであつた。しかし、しかたがない。9時はやがて針の指される所となつた。駅夫の笛! 汽笛!

同じ見習士官と二人(その人も西比利亜へ出征)は愈々はるか日本海を隔てたシベリヤの戦



場に旅立つことになった。万才！万才！と言う人もあった。かくて汽車は暗に跡を暗まして我々は停車場を力なげに足をはこんだ。家へかえって又氷を呑んだ。

○1919年9月5日 (金)

昨日、兄さんは兵士のことを思えば将校の負っている背囊その他のものなどは少しも重くなく、暑いなどとはいって居られないといつて居られた。それを考えては我々は贅沢はいえないのである。

○1919年9月6日 (土)

晴天。土曜日学校から帰って来た時の気持は何時も思う通りよいものである。

○1919年9月7日 (日)

晴天。今日は兄が敦賀を出帆される日で又、9月7日は兄さんの誕生日であるのである。実に吉日に出帆されるのでめでたい。故に家では、西瓜とひやしたウドン（去年兄が好んで食べられたもの）を多数食べて祝った。

○1919年9月8日 (月)

晴天。葉山、箱根に行つて居られた兄さんが帰つて来られた。出征された兄さんの武装した写真が来た。

○1919年9月9日 (火)

晴天なれど風烈し。今はまだ7時始まりだからよいが、11日から8時になつて3時に帰る様になる。この方がいやである。今日は大変な塵でザラザラである。寝たのは10時。

○1919年9月10日 (水)

午後より雨降る。今日は乾燥しきつた東京市に一月ぶりで雨を降らした。木の葉の塵は流され、土の上にふわふわしていた埃も落ちついて空気はやがて清められた。急に涼しい風が吹き渡る。

○1919年9月11日 (木)

雨天。前日の雨は依然として降っていた。今まで暑かった夏が急にどつかへ行つて、晩秋の様な気持がする。一重物では寒いといったくらいであった。今日から8時始まりとなった。朝の寝坊はよいが3時に帰るのでは悲観である。寧ろ7時の方がよい。

博物の時間はこの頃おもしろい。先生のからにがおいしいのである。言われる度に、窪

田君と笑う(ひそかに)。依然としてからに、飛んでからに、解剖してからに、等。

○1919年9月12日 (金)

雨天。雨はまだ降りつづけて居た。遂にあわせを着た。教室の窓から時々硝子越しに、傍らに立って居る青桐の葉を見ると、雨のつぶがあたって、パラパラと音をたてて居る。全く一つの塵も残って居ない。気持よく降って居る。絶え間なく降って来る。庭に所々水溜まりがある。雨の日、鬼ごっこをするのが又面白い。ホカホカ湯気が出るまでやる。

○1919年9月13日 (土)

雨・曇交々。国語の試験が有る。徒然抄は習わない所を指されて悲観した。物理の先生が内藤先生になる。夕方、西比利亜^{シベリア}に出征の兄さんから御葉書を戴いた。
浦塩^{ウラジオストク}ス徳から。9月9日の夕方書かれたもの。

「7日夕3時敦賀解纜、夜浪高く候いしも明けて8日平穩満目渺々たる碧海のみ。9日午後1時初めて西比利亜を遠望、夕5時無事浦塩に投錨仕り候。船中にコサツク中佐居り仏語を解し得るため三日間よき話相手と相成申候。ロシヤ語も少し覚え申し候。夕方気温50度〔摂氏10度〕10月末の様な気持致し居り候。大口シヤの軍港も亡国の感を起せしめ申し候。今夜満月、港内静かに候。」(文右の如きもの)

13日夕方着。今は西比利亜鉄道で北へと上って居られるのであろう。日本人と露西亜人^{フランス}が佛蘭西語で話をするとはおもしろいことである。

《AESOPES FABLES を読む。P.1 ~ P.46》

○1919年9月14日 (日)

晴天。《AESOPES FABLES P.47 ~ P.77》これだけ読む。午後からはたいしたことはない。

○1919年9月15日 (月)

晴天。昼休に「ベース」をやると次の時間の歴史には非常に眠い。おまけに剣道があるから家へ帰ると眠らずには居られなくなる。

《AESOPES FABLES を96頁、終りまで読んだ》

○1919年9月16日 (火)

晴天。化学がむずかしくなってきた。物理もむずかしくなった。

○1919年9月17日 (水)

晴天。来月の4日には学習院との野球対校試合がある。練習ぶりを見てかえった。5時



半頃帰宅した。兄さんが『アラビアンナイト』(英書)を買って来てくださった。

○1919年9月18日 (木)

晴天。『The Arabian Nights, Ali Baba And The Forty Thieves. P.1～P.16(THE END)』を読む。嘗て読みたいと思った居た話なのだ。非常に面白かった。

○1919年9月19日 (金)

晴天。5年対4年以下の野球試合を見た。5年が7A対2のスコアを以て勝利を占む。明日は仙台から義雄さんと姉さん「富士子」と伯母さんのおいでになる。

『The Arabian Nights, Alladdin And the Wonderful Lamp. P.17～P.29』

○1919年9月20日 (土)

晴天。この頃は昼中は暑いが夕方・朝は涼しい。夜には風邪を引きそうなこともあった。仙台の伯母さん方は6時20分に上野へ着かれる予定である。6時に上野へ着いてしまった。早すぎた。6時30分に汽車がプラット・フォームのあなたにその青き光を表わした。即ち偉大なる機関車は轟々たる響きをたてて、突進して来た。ゆるやかに汽車はとまった。客がゾロゾロ中から表われる。義雄さんをやつと見つけた。荷物がたくさんあった。僕と母と義雄さんとは先に電車に乗って帰った。電車を忘れたと見えて驚いて見て居た。何物も驚いた様な目で、啞然として見て、泣きも笑いもしなかった。よほど神経が昂奮して居る様である。家へ入ると急に大きな声で泣きだした。僕の家を忘れたのである。義雄さんの御ばあさんも、お母さん(姉)も居られないので、又一つは恋しくなったのであろう。以前のとおりかわいらしい顔をして居る。

『Alladdin And the Wonderful Lamp. P.30～P.48(THE END) 読んだ』

知らない字を書きとつていくので時間がかかる。

○1919年9月21日 (日)

晴天。義雄さんは少しは馴れて来た。しかしまだ僕が抱こうとすると泣きだす。

『The Enchanted Horse. (A.N.) P.49～P.62 END を読む』

宣彦君が遊びに来た。

○1919年9月22日 (月)

晴天。今日は星が非常によく出て居た。気が晴々する。三弦さんが夜こられた。



○1919年9月23日 (火)

晴天。この前の週の火曜日から堺先生の所へ国語をならいに行つて居る。今日も6時15分から8時まで習った。七巻終えた。丁寧によく教えてくださる。義雄さんとも馴れてしまった。9月29日は義雄さんの御誕生である。

○1919年9月24日 (水)

秋季皇霊祭、休業。晴天後雨天。

《A.N. Sindbad The Sailor. The First Voyage. The Second Voyage.》を読む。午後から一高対附属の練習仕合を見に行った。一高としては、第一回目の仕合が未だあまりうまくなかった。投手、島村。捕手、木内。一塁手、兼重。二塁手、高根。三塁手、重成。遊手、小田切。左翼、池野。中堅、笹川。右翼、藤。附属では森がホームランを打った。7対3で負けた。9回目の初めから雨が本降りになってよわったが、雨中遂にしとげた。

◎ハバロフスク市を14日に出た御手紙が今日24日に着した。

「前略、昨13日午後2時何等の故障も無く当ハバロフスク市に到着仕り候。途中の様子概略左の如くに御座候。11日正午頃浦塩出発、同行16名は1輦の貨車に各々の軍用行李と共に乗車、二日分の食糧として浦塩兵站支部より受領せる乾パンと牛罐とを携行仕り候。ニコリスクまで20里なれども到着せしは午後6時頃に候。ニコリスク、イマン(浦塩北方約90里)間は鉄道沿線危険の為夜間は通行中止にて11日夜は貨車内に泊まり申し候。昼間は薄き夏襦袢にて暑き位に候えども、夜は外套、マント、毛布に包まりても寒き程に御座候。12日早朝(日の出は6時頃に候)6時ニコリスク出発、右の方は此高10乃至50米位の丘陵数限りなく起伏し、左は物凄き程平坦にて原と空と接する所遙として弁別すべからず、到底関東平野も比較になり申さず候。此の広い原、丘陵には木もなく勿論家もなく道路もなし。厳冬を過ぎて漸く萌え出したる草も既に秋風に吹かれて高さ辛うじて1、2尺にて至る所湿潤地其の中には野生の鶴も認められ申候。鉄道線路一直線にて天に沖するが如く汽車は時として一時間余も走り居り候えども此処にては、鉄道を守るための様なる家屋僅かに5、6軒10里20里を隔てて、散在致し居り候。殊に同情すべきは何処を見ても野と空とのみなる所に僅か一小隊位の兵が天幕生活にて鉄道守備の様子。高き櫓を立てて果てななき原を双眼鏡を手にして四顧しつつ警戒致し居り候。列車も機関車の煙突の両側に二名の兵士常に立つて警戒の任に当たり居り候。沿道に畑もなく勿論田もなく雑草のみに候。家のある付近には僅かなる「ヒマワリ」の畑、「トウモロコシ」等を認め申し候。「ヒマワリ」の果実は食糧になる由。御菓子の様にして食し居り候。午後1時ニコリスクより30里なるスパスカヤに到着仕り候。此処には第16師団の有力なる某部隊駐屯致し居り日章旗高く翻り居り候。イマンに到着せしは午後11時にて昨夜イマンより南方5、6里の所に襲撃有りた



る由に御座候いき。

イマンより北方は比較的安全なる為夜間も通行致し明けて13日には沿道に蹂躞を見得る様に相成り候えども大部分白樺にて仲々見事に候。柵にも使用致し「ペンキ」塗の様に候。59の戦鬪せしホール川を渡り午後1時半頃曠野の中遙にハバロフスク市を認め2時頃到着致し候。露国の兵営は赤レンガの立派な建物に候えば遠方より認め易く候。停車場にて検疫を受けコレラ流行の浦塩を通過せし為5日間当地にして隔離の身と相成り候。傍らに低き所アムール川洋々として流れ居り候。停車場は一般に日本の電車の停留場式にて大きな都市すらロクなプラット・フォームもなく、普通の所に汽車より道路に跳び下りをせざるべからず。出発は先ず一鈴暫くありて二鈴次て三鈴にて発車、客は停車間下車して散歩なりし居り、鈴にて集まり来り候。時間割もあてにならず、停車時間も頗るあやしきものに候。思いついた時に出発、止まる時は馬鹿にとまるし、走り出すと出鱈目に走り居り候。停車場は構も柵もなく人は固より牛、豚、鶏、鷺鳥、犬まで徘徊致し実に雑然なり。夜にはロシアの楽器にて貨車内にても闇中にてもダンスにてロシア人の無邪氣と暢気にはあきれ申し候。停車場は各国人及び軍隊にて欧戦争の画報にある写真の様に候。腰には剣、手にはピストルにて此の処は戦時気分候。ニコリスクにて銃声一発を聞きたるのみに候えども突然戦国時代ならんと存じ候。仏語の有難味つくづく感じ申し候。少し学問のあるロシア人、チエック等は之れを解し、頗る便利に候。ドイツ語は各国人とも知らず又話すを不快と致し居り候。ロシア語は単語をならべとにかく用をたし居り候えども本の無きには閉口致し居り候。此れより研究仕るべく候。ロシアの子供は日本語を覚え始め少し位の会話は致し申し候。私等のロシア語よりは遙かに上手に御座候。

当市道路頗る不良、実に車軸を没する猛烈なる泥濘に候も人力車に相当する二頭馬車は駿法の妙と構造の功にて自在に走り居り候。

先は近況御報知まで、まだ様子も十分わからず品の用不用も申し難く候。親戚の皆様にも御序での折宜しく願ひ上げ候。勿々。

9月14日 ハバロフスク 龍一

御母上様

と書いてあった。面白く拝読した。シベリアの大体の様子がわかった。次の御手紙の到着を切にまっている。

○1919年9月25日 (木)

雨天。

動いてからに。塩気の水を含んでからに。大分その鼓膜にひつついてからに。空気の浪がドーンときてからに。天気によってからに圧力かわりますから。大砲などの大きな音が



きてからに。膜で張られてからに。一番しまいの此処へきてからに。下の途へ波がかえつてからに。こつちのやつをガーンと鳴らしてからに。

等が今日博物の時間に稲葉先生が言われたカラニであつた。合計10。多い日は14であつた。

○1919年9月26日 (金)

晴天。国語は堺先生に御習いしてから非常に楽になった。今日は2時に帰れる日である。義雄さんはよほど僕になれて来た。29日は誕生日である。併し多分日曜日に御祝があるはずだ。丁度一年目第一回である。歯はまだ犬歯(右の一枚)がやっと光を表わし、その他は門歯下二枚だけである。匍匐することはできるが、足で立つことは出来ない。田舎からお茶の水の書記になる人が来た。親類の太田の別家の方である。飯田町の停車場へ御迎えに行った。停車場で、『Sindbad The Sailor. The Third Voyage』を読んだ。

○1919年9月27日 (土)

晴天。よい小春日和の天気であつた。正午、学校から暢気に足を運ばして帰つて来た。何時も言うけれども、土曜の午後は気が晴れる。今日はことさらであつた。夕方、一天矢庭にかき曇つて夕立一過する。涼風即ち面にあたり。木の葉涼しげなり。夜、西比利亜のハバロフスク、極寒にして肺を痛めて護送された兵士何名などのことを知つて、甚だ兄を案じた。御無事のことを祈る。

○1919年9月28日 (日)

晴天。今日は靴を磨いたから、明日は雨が降るだろうと思つたら、月曜日には降らなかつた。『A.N. Sindbad The Sailor. The Fourth Voyage. The Fifth Voyage.』を読んだ。

29日の義雄さんの御誕生の御祝を今日に繰り上げて、夕飯に御馳走があつた。本人の義雄さんは何にも食べられないが、僕と仙台の兄とは肉を二片食べた。

○1919年9月29日 (月)

晴天。朝仲々寒かつた。学校で鈴木久雄先輩の逝去されたのを知る。今年の夏水泳部で元気に泳いで居られた。試験も我々は受けたのであつた。帰宅すると先ず義雄さんと少し遊ぶ。

○1919年9月30日 (火)

晴天。記事なし。



○1919年10月1日 (水)

晴天。ローレル・リーダーIVを始める。十分、グレイデッドはやめることになる。幾何の比例の所はつまらない。風船新聞なんていうものを時間中に発行してまわすものがある。

○1919年10月2日 (木)

晴天。飛行郵便、東京→大阪間が実行された。二百馬力の飛行機が飛ぶ。学校で体操が終って見たが中々早く、美しい飛行機であった。体操の今までの帽子を排して野球用の帽子を冠るものがある。我が級のある者ども、今までは庇がないから眩しいというのである。先生も許した。僕は買ってなかったから勿論冠らなかった。買わないつもりである。

○1919年10月3日 (金)

早く帰ったのはよいが、義雄さんが居るので遊んでしまった。仙台の伯母さんの所から梨が来て、夜は皆で団欒しながら食べた。東京にはちよつと得られない大きな水気のある非常にうまい梨である。あちらの名産である。

○1919年10月4日 (土)

晴天。漢文の時間も徒然草の時間も予習がしてなかったので内心ビクビクである。

(日曜日のこと) 梨や、お菓子や落花生などを楽しい火鉢のある室で愛嬌のある義雄さんを囲んで食べた。

今日は、青木へ遊びに行った。雨が降りそうであったので傘を有って出掛けた。本郷三丁目で乗り換えるときに車掌台へ傘を忘れて下りた。少したって何だか手が軽いと思つたら傘がない。それで急いでその電車を追いかけた。中々早いのと、僕の和服なので中々追いつかない。次の区役所前で危くとらえたのであった。そのときは息が絶えそうであった。

吉原へ用をたして青木へ行った。実さんも、四郎さんも、泰ちゃんも居られた。球投げを二時間半程した。夕食はうまかった。9時頃まで遊んで帰った。母が、左の目に光が指すと脳がいたくなるといわれて静かに帰った。家へ着いてすぐに休まれた。

今度は青木へ傘を忘れて来た。僕が帰ってから後で兄が帰って来られた。

○1919年10月5日 (日)

晴天。少し寒し。朝、母は癒つて居られた。疲労から来たものであった。今日は、昨日兄に買っていたいただいた英語の本、Stories Roland を少し読んだ。カロロ五世のことも書いてあった。土曜の日記の始めの部分に書いてあることは今日のこと。



○1919年10月6日 (月)

雨天。雨が降ると仲々寒い。「義雄さん(姉富士子の赤ちゃん)の匍匐している姿のスケッチ有り」

○1919年10月7日 (火)

雨天。4年乙級の半数のものは先生に対して生^{なま}生^{まい}な考をもつて居るので甚だ遺憾に思う。彼等は先生(宮下先生)を徹頭徹尾罵^{ののし}る。宮下先生も、たしかに無理な所があるが我々生徒はもう少し温順に出なければならぬ。先生のお話を何と思つて聞いて居るのか。己れを忘れて言われることに公平に聞かないで、なにを言われようと、けなしてしまふ。満てる器に水をくむことは出来ない、というのはこのことであろう。

○1919年10月8日 (水)

雨天。今日は十五夜。澄み渡った空に満月皎々と輝いて屋根銀色を呈す。昨日、西比利亜の兄さんの所へ御手紙を出した。昨日、仙台の伯母さんから又梨と栗をいただいた。

○1919年10月9日 (木)

晴天(快晴)。古川先生が御体が思わしくないので今学期中御休みになるということがあった。その間だけ美濃先生が代数を担つてくださる様になった。何処の学校の先生だかわからない。作文(英語)の宿題が二章相変わらず出た。佐藤先生の所謂英訳文である。

○1919年10月10日 (金)

快晴。昨夜は8時頃、白鳥(Cygnus)を天の真中に坐え、Milky Way 北東に架して、カシオペア、鷲、何れもその上にちりばんで輝々として居た。

今朝は全くの小春日和であつた。兵式体操は皆が共同一致して真面目にやったので20分程早く後えた。

○1919年10月11日 (土)

晴天。幾何も代数もなんだか面白くない。山内先生が5年まで教えてくださったらよかったのだがなあとつくづく思う。土曜日は学校の科目上より見るとあまりよい日ではないのである。三時間目あたりから脳が痛くなりだしたが、通してしまった。帰宅して昼食をすませて、すぐに寝た。夜にはよい加減なおつた。

○1919年10月12日 (日)

晴天。暖し。風邪気もすこしあったので、冬シャツを出して二枚着た。少し頭が痛かったが、午後からある学習院対の野球戦に行つた。1時20分に学習院のグラウンドに着いた。フリー



バッティングをやって居た。両方ともショートは下手だ。2時過ぎること少許。試合の幕は開かれた。附属の先攻。

捕手 (主将) 森田 (5年)、投手森 (4年)、一塁手窪田 (4年)、二塁手樋口 (3年)、三塁手福田 (3年)、遊撃手佐藤 (5年)、左翼手河野 (3年)、中堅手高田 (3年)、右翼手伊藤 (3年)。

1回は無為。併し学習院は Know ダンで、2runner で仲々優勢であつたが森田よく受け、森よく投げて無事にすむ。2回目に附属は Second Third に Runner を出して、One ダンなるとき樋口よい Bound を Third の方に向つてと転じて、森田生還その時、敵の Catcher はマゴマゴして Pitcher が投げたがすこし高球であつたので、すべりこみに奇麗やられてしぐじり、ゴロを転した樋口は Catcher の First へ投げた球のわるいため First はずし、樋口は Safe。その間に伊藤 (二塁に居たもの) がまさにホームへ入らんと走って居た。First はあわてて捕手に投げて高球とどかず、Home In。それで樋口は二塁に進む。時に学習院の応援者、声なし。附属活気に満つ。次の Butler 三振。次に高田 (一番) 三塁打、Left Over 樋口、楽々と生還。2回目3点入る。次の Butler 河野三振。おしくも高田を入れることが出来なかつた。その後、森の三塁打によりて1点、又何かで1点を得。三塁打になりそうだったのが2本程まだあつた。しかし敵の中堅よくバックして捕え、機を逸す。敵は Left Over の三塁打によりて、1点をしめそれきりなりき。我が軍にては右翼の伊藤失策やや多し。又遊撃手も。高田、樋口、河野はうまかつた。森田は捕手の上に上がる。ファールは悉くこれをとつて、勝負に貢献するところありき。一度これによりて危機を脱せることあり。5対1にて凱旋を奏して帰る。

頭が少しいたかつたので、すぐ寝て、何にも勉強をしなかつた。約11時間の熟睡をする。

○1919年10月13日 (月)

晴天、時々雨降る。西洋史の進みかたがまるで早く、斎藤先生には (講義の面白さ) 及ばない。この分では4年の中にすんでしまひそうである。物理はかなり面白い。英語の試験が延びた。夕飯を食べて居るとき、郵便が来た。西比利亜からしばらくこないの、今日のこそはそうだろうと思つて待つて居た。案の上そうであつた。

その御葉書は9月23日にアレキセークスクを出て居る。20日間も立つてやっと今日着いた。左の如くである。葉書のかたも字も大概まねて書いた。絵も色も。風邪は大抵なおつた。〔註：葉書はまるでコピー機でカラーコピーでもしたかのように精密に筆写されている。絵には大砲を据えている兵士の姿が描かれている〕

(10時半) 今晩は非常な濃霧で5間許り向こうの電灯すら、その光朦朧として、鳥渡、名画家でも映せないにちがいない。木の膜も加減、空の息のつまる様な濃の具合。こんな東京みたいな平地にこんなすごい濃霧がくるかと思われる程である。電灯 (室の) の光に細い

ちよつと



霧つづがごくごく静かに動いているのが見える。四囲はこれによつて、益々静寂の度を増す。

(郵便はがき、陸軍大臣官房)

大日本東京市小石川区同心町18

小池光子様

23日、於アレキセーフスク 龍二

「19日午前ハバロフスク発21日正午、160〜170里の汽車行を終えて当アレキセーフスクに到着仕り候。毎夜は停車場に停止、例の貨車内に夜を徹し寒氣の身に迫るを覚え申し候。霜は既に4、5日前より降り居り候えども日中は非常に暖かに御座候。当地日本軍兵營は丘陵に在りて眼下にゼーヤ川を睥下し其の彼方は果てなき野原にて御座候。概して東南方は沃野にして物資豊富なる噂に御座候。過激派は真に盜賊的にして之れを征服せんとする日本軍の苦痛甚大の様に御座候。彼等の連絡は仲々上等にて討伐に出でても遭遇する事は稀の由。其れにも関わらず平素は日本軍の目を忍びて壮丁を拉し去り被服糧食の奪掠、鉄道の破壊、斥候の邀撃等絶え間もなき様にて哈府方面は大分趣を異にし居りロシア農民の不幸憐然と申すが殊に慘憺たるものにて其れにつけても日本民族の大幸福一に御稜威の然らしむる事と存するの他無候。又ロシア軍人としても他人殊に10年前の怨敵と手を取り自国人と兵を交うに至りては断腸の思あるへとし存し候。乍然彼等の暢氣なる有様を見ては亡国を思わしむるのみにて最早支那人と選ぶなきかの如くに存せられ候。目下未だに中隊附を命せられず連隊本部に在りて一般の状況を聞き居るのみに御座候。先は近況御報知まで身体は頗る頑健に御座候間何卒御休心下さい。10月の追送には空氣枕を御願申上候。勿々。」

○1919年10月14日 (火)

晴天。近頃はベースの試験に大抵勝っている。丁度9人居る。

○1919年10月15日 (水)

晴天。3年生が昨日から旅学旅行に出掛けて運動場が少し生々した。

○1919年10月16日 (木)

晴天 (快晴)。2年生が旅行に出掛けて尚さっぱりした。のんびりとベースが出来た。

○1919年10月17日 (金)

快晴。新嘗祭。6時半に起きた。一杯の御飯をやっと食べて出掛けた。同心町で電車に跳び乗り伝通院に着いたときおりよくも江戸川行が来ていたのでこれをのがさじとかじりつき、やがて飯田橋に行く。下りて電車はどうかと外堀の線を見ると、方に10間程の所に



赤坂見附行が動きだす所であった。走ろうとするや否や、電車は動き出した。これぞ逸すべからずと、全速力で追いかけた。運転手は、ばかに早くスピードをかけたので鳥渡間に合わないかとも思ったが(ほんの一閃)併し更にこっちも馬力をかけた。やっと追いついて飛びのった。腰を下ろす。胸が非常におどつている。市ヶ谷の辺で堀君が乗った。赤坂見附で納富君に逢う。8時にならぬ中に渋谷の玉川電車の終点に着いた。

三軒茶屋までの切符を買った。三軒茶屋にて下車。永井清君と共に歩いて、玉川の終点に向かつて歩み続けた。思ったよりも道程があった。そのせいか、鳥渡へばった。色々の話をしてしばらくは機械的に足を運ばせた。駒沢の少し手前で、第一等に走つて来た中島、早瀬川の両5年生に会った。次に5年の木村がきた。渋谷、渋谷、斎藤、中島、天野、広井先生、中島(4甲)、内藤先生、松村先生等、相續いて走つて来られる。広瀬、上村、五十嵐、坪井等。広瀬は中島(4乙)の次、随分早い方であった。

何れも歓迎の辞をあたえた。第一決勝点へやつとついた。甲級の堀が来た。坂の上まで歩いて行つた。山本が走つて来るのが見えたので、堀はそこから走りだした。元氣回復したと見えて随分早く駆け下りた。やがて最後の決勝点まで歩きついた。

皆(決勝点に居た2、3名)が初めから歩いたのかと聞いたから、うんと笑いながら答えた。向こうでは本気にしたとみえた。しかし、それはそのまますんだ。今まで3年までして来た競争は春、稲が青いときであった。今度初めて稲の黄色く実った秋にやったのである。小春日和であった。ぽかぽかと暖かく、東京の空とちがう心地がする。これはどうしても四囲の景色、空氣の美しく、高潔なためであろう。急に肺のごみがとられ目の塵がはらわれた様な氣持。一方には奇麗な玉川の急流が流れている。砂の上で2、3名のものと日なたぼっこをした。その内に稲葉先生の御講話があった。

正午、昼食をすませて、すぐに電車に乗つて、渋谷に着く。赤坂見附乗りかえ、水道橋乗りかえ、白山乗りかえ、一高前下車。小出と一緒に一高対満州の仕合を見に行く。裏門の隘せまい口から大勢の看衆が競つて入ろうとするから推されること大変である。僕も随分推されて、息が出来なくなりそうになった。右翼の後で見た。この日は三高との時の様に人波は出なかったが、観衆二万人と言つてよいであろう。僕等は割合によい所を見た。前の方で後の人々のために坐らなければならなかった。一高のメンバーは今春と殆ど同じで、投手は内村、笹川が右翼、三塁だけは新しい重成であった。4A対1で一高は敗を蒙った。敗因は2回目に木内が三塁打を打ったにもかかわらず、1点しか入れなかった。打った木内は殺されるという有様。木内の次のバッターが中堅下、前の方にライナー、大門よくこれをうけ、一度どんぐりかえしをして、三塁によい球をなげ木内ささる。木内はその球はヒットだと思つて出たのである。この好機にもう少し入れておけばよかった。

又、満州が一度に4点を得たときはからであった。鳥渡よいヒットで一塁を得、内村の4球に出で一方は二塁を陥れ、又4球で出で無死満塁。木内、内村の少し高き球をのがし、

一人生還。次のは内村にひねたれてピーゴロ、重成これをあわててホームに抛つて球わるく、生還又もや重成ホームへ投げ、1バンウド、木内のがして生還。こんなことでバッターはことごとくセーフ、もう一人生還す。次にピーゴロ、内村の所へ行く。三塁のランナーを牽制して、一塁に投げアウトとなる。次に二人、内村見事にインドロでひねつて三振。後両軍、得点なし。敗因はこんなものである。歩いて帰った。内ヶ崎、森に遭った。

○1919年10月18日 (土)

晴天。暖し。昨日、新嘗祭に長距離競争があつたから、今日は休みである。一日家に居た。夕方、郵便飛行機の空を疾翔するのを見た。全く早い。夕方、アレキセーフスク、ゴロダ守備隊を10月3日夜に出た御手紙がついた(兄より)。

「前略。少しく御無沙汰致し候。近況申上べく候。去月22日午後、当アレキセーフスク到着。26日までは連隊本部に在つて一般の情況を知るべく副官、旗手の傍につき居り申し候。27日第7中隊小隊長を命ぜられ同中隊も当市に在る為、爾来当市に起居致し居り候。他の見習士官は中隊が異なる為他所に出発致し同期生は遂に一人も居らぬ様に相成り候。アレキセーフスク市の概況、欧州戦争以前に於てロシアは当市を以て西比利亜の重鎮とし、支那国境に近づきブラゴウエシチェンスクは兵備上不利なるを以て、其の繁栄を当市に移さんとし、大規模に市街を計画し始めたが1912年に候。不幸にして程なく大戦の為、此の計画も中止となり今日に至り候。為に人口1万、道路の中は頗る大(広き所40米位、普通の所10米前後)なれども家屋疎散、市街中に白樺の木、草地等至る所に有之候。市はセーヤ川に沿う。平地にある部と丘陵上に位する部との二部に分かれ守備隊は後者に在り。ゴロダと申し候。ゴロダには活動写真館の貧弱なるが一つ有るのみ。他に賑やかな所は無く、日暮と共に道通う人も居らず、犬のみ吠え居り淋しく候。産業等はれと申すもの無く壮丁は徴兵の為少なく下等社会の者は辻馬車を営業とし、一般に牛、がちょう、豚を飼ひ居り、昼間は人と同様道をうねり居り候。市民は靴を節約するため暖かき間は裸足にて服装もみすばらしく候。風俗概して質朴、欧露より移住せる者多く候。仏語を解する者少なく、女学校にて教え居り候。中隊の現況詳しき事は例の軍機上と相成り申さぬ事と相成り居り候も兵卒は勤務(歩哨巡察等)に多忙にて一週間の中、完全なる一夜を寢室にて過ごす事は1、2回に候。入浴も2、3回位に候他は他所に勤め居り実内地にて知らぬ苦勞を致し居り候。中隊全員は百名以上に候も、いざ敵襲と申す時留守番の兵は僅か20名前後に候。殊に心細き次第にして兵舎は在来の民家を家賃を出して併用し周囲に散兵壕、簡単なる鉄条網を繞らし居り候。各営の為薪は山程に集め、窓は二重張、便所の板壁も二重張準備怠りなく候。中隊には鹿2頭、犬5、6頭、猫、馬等を飼ひ慰みものと致し居り候。食物は牛肉内地よく来して乾、瓢、土地の印、大根、キャベツ、人参、馬鈴薯等にて



魚は殆ど絶無に候。砂糖少なく。醤油はエキスを使用。炊飯は兵卒に候えは原料はよくとも其れ相応に味が出ず三度共千偏一律煮物と吸物の中間の様なものばかり作り居り候。氣候、例の大陸的にて1時頃は70度位〔摂氏21度〕に候も夜は11月の末12月の始位に候。乾燥し居り氣持よく候。風は未だ吹かず、既に何処も赤褐色にして青色はなく白樺の白いのが殊更に目立ち申し候。私は陣地構築に関係し側面、距離測定、工事等を目下致し居り候。頑強に候間何卒御休心被度候。一昨日は外索兵に服務中過軍襲撃の為木橋を焼かれ居るのを遠望し残念至極に候いき。先は近況御報知まで。

親類の方にも御序での節宜しく。手紙を認めるのも頗るおつくつに候。

10月3日夜 アレキセーフスク ゴロダ守備隊 龍二

御母上様 膝下

出征の写真有之候わば一葉御送り被下度候。くだされたくせうろう又近、歩、三、見習士官世良田勇と云う人にも一枚御送り被下度_{くだされたく}在校間の学友に候。吉彌さんにロシア語の本御願致し置き候間代価を御願ひ申上候。追送品には別は是れと申すものも無之候えども、海苔、鯛味噌、デンプ、海賊等、頗る有力に候いき。当地菓子は脂肪分が多く日本人に向かず候。」

と書いてあった。面白く拝見した。

○1919年10月19日 (日)

晴天。今日も又休みの日である。実に氣がのんびりした。朝起きたのが余り早くなかったたので、机の引出を整頓したり、本たてを整頓したりして、すこし余計なことをさしていたら昼になった。午後からもこれと云う様なことなくてすんでしまった。義雄さんが居ると、全く時を忘れてしまう。からかったりして、もてあそんでいる中に、やがて日曜もすんでしまった。全く時の推移は早い。

正午になって暖かくなつたと思つている中に、1時が来る。暖かみはなおます。2時がくる。3時がくる。日光がよくなる。1時間1時間はすぐたつて、4時、5時。5時となると早暗い。日が短くなった。6時には電灯によらざれば何事も出来ぬ。

日が立つのが早く、週が送られて行くのも早い。月が去つて行くのも早い。もうすぐに11月になる。だから、うかうかしていると大変なことになるのである。氣を引きしめ頭を善用せよ。時間を善用せよである。併し僕の様なものには、識らず知らずの中に、こんなことが頭から抜けて行くことが絶えない。まだ、しまりかたが足りないであろう。思つても思つても実行がむずかしいのである。

○1919年10月20日 (月)

晴天(快晴)。この頃は全く運動に適したよい氣候である。もう少したつと寒くなつて、



日なたぼっこが流行りだす。風邪をひいているので、剣道は見学した。顎の下、掻きこわしは今日やっと癒った様である。何日悩まされたか、自由に前の如く様になったことは、まことにうれしい。運動がしやすい。

○1919年10月21日 (火)

晴天。学校からかえると、腹がへつてたまらないのを感じる。お菓子か御飯を食べる。否両方たべた。(今日などは) 気持がよくなると、眠くなる。僕はその癖の悪いことは前から知っているが、抑制することが出来ない。床を敷いて寝る。5時まで寝た。昨日、しらべておいたので、しらべる必要がなかったのはよかった。堺先生の所へ習いに出掛けた。5時45分に出た。合わせ一枚で羽織なしであつたものだから寒かった。何んという見事な星の夜であつたろう。あらゆる星は皆高き遠き遙かあなたに小さき光となつて姿をあらわしていた。道を歩く人よ、たまには空を見詰めよ。頭に無限の距離を有すことを思ったことのある者はちよつと少なからう。束縛がある様にこせこせする必要はない。がやがやした喧しい町の中でも上には大なる自然がある。気をのんびりさせるものがある。

○1919年10月22日 (水)

晴天。漢文、論語、むずかしい。西^{シベリア}比利亜の兄さんの処へ御葉書を上げた。

○1919年10月23日 (木)

曇天。剣道の大会があつた。紅白勝負。出ルポンをやつた。こちらは全体として人数が少なかった。大将坪井は敵の五将に当たり、奮戦すること5回、遂に敵の大将まで抜き、一本一本勝負ということになる。我々は一生懸命になって応援した。籠中を見事に入れてこちらの勝利となる。雀躍して大いに喜び且つ坪井を賞めた。

寝る前湯に入つたのでぐつぐつと眠りこんで、そのためすこし寝坊した。

○1919年10月24日 (金)

雨天。学校で喧嘩をした。癪にさわつたから。癪にさわる様なことを行つた奴の2、3人にかかった。後では仲直りして話もした。剣道の三本勝負には一本とつたが負けた。敵の得た二本目のはどうしても僕には入つたとは思えない。審判官の手が動いたとき、いささか心の中が騒がざるを得なかった。又癪にさわつたが今度はしかたがない。無言の中に怨を呑んだ。運がわるいときは運がわるいもので、今日は何だかいやな気持がする。早く新しい明日がくるといい。

10月22日のところで落としたこと。

東京大阪間の郵便飛行の成功した日。佐藤中尉ともう一人だれだれ。3機が試みたので



あったが、2機無事大阪着。1機は雲のために方向を誤って和歌山の方へでた。これは日本で郵便飛行がこの日始められて、最初に成功したものである。3時間と35分でこの間を飛んだ。佐藤氏第一着(新聞にて見る)。欧州、米国では雨中といえども飛ぶこと自在である。また、英吉利^{イギリス}、豪州間の懸賞飛行まである。英、米、英、仏などは勿論これで往来して居る。英、仏などは人まで運ぶ。併し日本で今出来る様になったことは喜ばしい。当人は名誉である。するまでが大変であつたろう。ここに於て郵便交通の便は絶頂に達したのであろう。しかし雨日にも出来るとよい。継続してこれを実行するようになることを望む。東京、大阪はこれによつて接近された。

○1919年10月25日 (土)

曇天。今日は剣道の大会の最後の日である。外来選手との三本勝負と15名ずつの、附属対外来の紅白勝負があつた。こちらの先鋒、4年の窪田、先ず7人を切り斃す。次に4年の須田、又もや7人を薙ぎたおす。次に4年の諸井、大将と交戦し一本も与えずして、敵軍のとどめをさす。3人で15人に当たる勝負となる。而もその3人は4年のみで5年のもの12人は戦わずして凱旋することを得た。かかる仕合は世に稀に見るところである。否、空前のことであろう。これによつて附属軍の如何に強固にして抜くべからざるを知る。又、大将の如何に強きかを思いやらる。

月曜に英語の試験なのでその準備を夜遅くまでした。

兄〔政美〕さんは日曜に学校の僕の質問は決して受けない。勉強(学校)は毫もしない。日曜の午後からは内村先生の御講義を聞きに聖書をもつて行かれる。日曜にそこへ行かれることを欠かしたことは一度もない。どんな用があつても、人に誘われても、その方は止める。

○1919年10月26日 (日)

晴天。風薙ぎて理想的小春日和。午後2時頃、青木の喬さん^{たかし}が久しぶりで見えた。僕と姉さんと義雄さんしか居なかつた。僕はすぐお菓子を買ひに出掛けた。義雄さんは喬さんと一番先に会つたのだが(仙台で)もうとつくにわすれて何かしようとするど泣きだす。4時半頃、仙台の兄さんが帰つて来られた。喬さんはお蕎麦を二つ食べて、5時、士官学校に帰られた。士官学校や幼年校では寧ろ悪風邪がはやつて居るそうである。

夜10時頃、仙台の兄さんがお蕎麦を^{おじ}驕つてくださった。因に僕はお芋屋に寄つた。正に戸を閉めようとして居る処であつた。太いのが2本、大きな籠の上に乗せられてあるのみ。これが最後の2本で外にないと云う。5銭買ふつもりだったので、手に5銭白銅1個しか握つて居ない。価7銭の2本のその芋を5銭に買つて来た。お上さん^{かみ}は笑つて居た。売れ残りだからいいと言つてくれた。



○1919年10月27日 (月)

晴天、風なし。そろそろ臨時試験が近づいて来た。今日は英語の試験があつた。大体出来た様だ。小学校の運動会を見た。海軍の大演習が館山沖で催さる。軍艦日向の砲塔爆発して死傷者30名程を出だす。又、怒濤にさらわれて命を失った人も居た。此等の人は全く気の毒である。不運な人々である。これから腕を振るおうとして居た人も居たろう。実に気の毒である。

○1919年10月28日 (火)

雨天。大塚線のレールが段々新しいのに入れかえられて居る。今、清水谷の所まで来た。電車の前後のロッキングが無くなって、気持よく走って居る。今日は、艦観式が催さる。天皇陛下の御召艦は摂津である。

○1919年10月29日 (水)

曇後晴。地理の時間。今日は印度、セイロンを一時間に終えてしまった。

○1919年10月30日 (木)

晴天。我が学校の記念日である。講堂で式が終えると、小学校の橋の所で余興があつた。講談もあつた。後、絵画展覧会を見に行った(附属中学の)。ノックをして遊んだ。実にほかしたよい天気であつた。飛行機が(水田中尉の)飛んだ。後で聞くと、東京市を飛行上より活動写真機で写すためであつたということがわかった。陸上運動小会を少し見て帰った。2時半であつた。

○1919年10月31日 (金)

天長節。9時すこし前から雨が降り出した。式がすむと、すぐ帰った。広瀬に入れてもらって帰った。しとしとと降ってやみそうもない。とうとう晩まで降りつづけていた。観兵式はあつた。

○1919年11月1日 (土)

晴後雨。7時15分前に眼がさめた。腹が痛む。学校に行くことが出来なくなった。精勤証の望がここに絶えてしまった。お昼頃には殆ど痛みがとれていた。大掃除の日である。いつも来てくれる人のよい、よく働く職人が来て掃除をしてくれた。まかせきりでも少しの心配がない。実に職人でこれくらいの人のは先ず居ないと言つてよからう。又親切である。云うことが又面白い。幸福な人である。

夜に、米国のサーストンという人が書いたのを碧川紅雨という人の訳した『少年僧正』



を繙いた。読むのは二度目である。実に良書である。この書を読んで、ある何物かを得た。ちよつと書けないからやめるが、口にもちよつと言えないが、心にはよく沁み込んでいる。良書を読み耽つて、ある感にうたれた時ほど、氣持のよいものはない。心の中に新しき清き種を蒔いた様な感じがする。こういう本を読む毎に、我が友の、くだらない小説などを読んでよろこんでいる者に読ませたいと思う。併し彼等はどういう書を読む目がどうかへ行っているであろう。これを喜ぶものは少なからう。味わつて自分のことに引きくらべて考えるものはなお少ない。

近頃、どうも学校の風気が輕佻浮薄に流れている様に思われる。彼等の談じて笑うことが碌なことでない。くだらない事や変なことを言つて笑っている。実にくだらないのにはあきれる。一緒になつて聞いているのがいやになる。浮薄になつた。どうしたらもつと真面目にすることが出来るであらうか。僕にはわからない。戒めれば多勢をたのみにして、くそまじめとか何とか言つてやじられるにきまつている。又は勢力のあるものは決して聞くにもしないでけなしてしまふ。全くふわふわした人間のよりあつまりである。勿論よい人は居る。よい方は抑えられがちになつている。この有様を見ては慨嘆せざるを得ない。僕は故に思う。自分で自分のことを先ずちゃんとして、決してそのふわふわな風に入らない様に、そんな変なことを思つて笑うようなやつのことを聞いて笑う様なことのない様にしよう。これはたしかに守つて行けると思う。彼等が如何に強くとも少しも恐れる所がない。この頃、痛切に思っている。制することが出来るだけ、彼等を戒めこらさなければならぬ。併し僕には全くむずかしい。

良友に交わつてどこまでもふむべき道を通らう。かねてからの所感。

○1919年11月2日 (日)

快晴。今日も『少年僧正』のつづきを読んだ。クリスト教に関係がある。涙が出そうになつた所もあった。感心する所は勿論あつた。

関東—関西の野球戦は4A対2で関東の勝利となつたことを知つた。夕方、西比利亜の兄さんの所へお葉書を書いた。夜は十日の月が西に懸かつて、雲はその清らかな光に掃われて、一線も残して居ない。星が輝々と輝いている。カシオペア、白鳥、琴、ペガスス、アンドロメダ、ペルシウス、牡牛、三角、馭者、オリオン等の星座を瞭然と見届けた。義雄さんにこの星とこの月とを見せられたならば、この間の様に手をのばして、とりたいた示すであらう。まだ言は勿論言えない。

就床11時半、すこし後れた。

○1919年11月3日 (月)

代数はつまらない。どんな課目でも先生が教え方がうまければ面白く、よく覚えられる。



生徒の成績の良否はまたこのことにも大いに関係がある。歴史も教え方、話し方が面白くないから、せつかくの西洋史もつまらないで過ぎて行こうとしている。齋藤先生だともっとも面白いのである。代数は古川先生の方がよい。大きな望みを云えば2年のときに教えていただいた山内先生である。

○1919年11月4日 (火)

雨天。学校の全チームの争覇戦が昨日から始められた。四郎君の方が一番強いとみとめられている。

○1919年11月5日 (水)

晴天。颯^{やが}て秋の末になる。この頃の天気は実に身体に適している。運動に絶好である。夜の月もよい。まことにこういうよい天気は一年に二度来ない。遊べ!!! 遊べ!!!

○1919年11月6日 (木)

雨天。国語で『古今東西を包容せよ』の所がすんだ。日本人は独断的、総括的、感情的の癖があることを述べられた(森本先生が)。一つの大きな欠点であると僕も思う。帰納的に組織的に理性的にならなければならない。外国に学ばなければならない点である(米欧に)。

又、近頃日本の学生は目前の利害に汲々として古今東西を包容して大いに精神上、大きな所をのがして居ることも言われた。全く、心の堅固な又自分の考えのちゃんと定まった人、又は人格の人が少ない。人格を非常につくり上げる必要がある。良書を読んだりして、偉人の言行を学ばねばならぬ、心に最もであると感ずる本を読まねばならぬ。自分で軽薄に流れぬ様にしなくてはならぬ。勿論、始終真面目で居ろというのではない。冗談にしても、そこに本心を失った時、そのときは軽薄なるものが自分を襲わしめるのである。

友達と遊び戯れるときに、軽薄な言を吐いたり、挙動に表わしたりする様ではだめだ。人格はそこから崩れだす。いつでもそんな調子になって行くのである。すると次第に性となつて、ふわふわした人間が出来るのである。ふわふわしたのは男児には大禁物である。故にこれは潔かろうとしている人には強く言うのである。真面目に後を考えろ。後の言を考えろ。かるはずみに言を吐くな。気をつけて言え。気をつけることが一度でもあるならば、その人はそれだけふわふわから遠ざかるのである。(所感)

又、森本先生は国語の時間に日本の近頃の物質的文明には精神上どうかということを一西洋人から聞いたといわれた。僕にはわからないが、その西洋人の述べたことは尤もなことであるといわれた様に覚えている。



○1919年11月7日 (金)

快晴。十五夜。夜明ごろより雲は一朶をも見うけなかった。ただ一面に朝靄が下りて、それが徐々に上へのぼって行く。7時頃は早紺碧の空は朝日に一入その鮮やかさを増している。一分も惜しく思われる程な気持のよい天気であった。

学校で教えて戴いている中も、左の肩にそのあたかな日がさして、次第何とも言えない気持ちになる。窗外を見る運動場には誰も居ない。うらかな気が充ち充ちている。実に惜しい気がした。遊びたくなる。休時間には大いに運動をした。今日は英語の佐藤先生がお休になって、漢文が二時間。Sweet先生がお休になって博物が二時間。

兵式体操が終ってから、一時間半ほど遊んだ。それから4年以下の甲乙の柔道の仕合を見に行った。丁度4年が始まったときであった。こちらは副将の小林君が休んだ上に、上の方に休む人があったので、大いに勝負に影響した。大将の杉浦君は三人を抜いて、四人目に引分けであった。非常にへばって力が出なかった。

十五夜、よい月夜であった。帰宅してあまりの疲労に9時まで寝込んだ。10時まで勉強して寝た。

○1919年11月8日 (土)

〔記載なし〕

